國學院大學学術情報リポジトリ

〔インタビュー〕道標：本居宣長記念館館長 吉田悦之氏

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉田, 悦之, 石川, 則夫, Yoshida, Yoshiyuki, Ishikawa, Norio メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000441

〔インタビュー〕

道標

本居宣長記念館館長　吉田悦之氏

吉田悦之氏は昭和三十二年三重県松阪市生まれ。昭和五十五年國學院大學文学部文学科卒業後、本居宣長記念館研究員になる。平成二十一年には同記念館館長に就任。公益財団法人鈴屋遺跡保存会常任理事も務める。著書に『日本人のこころのことば　本居宣長』（創元社）、『本居宣長の不思議』（本居宣長記念館）、『宣長にまねぶ』（致知出版社）。編著には、『21世紀の本居宣長』（朝日新聞社）、『本居宣長事典』（東京堂出版）などがある。本インタビューでは、國學院大學時代の思い出から、本居宣長記念館研究員として資料調査にあたったこと、本居宣長を研究する原動力としての学芸員の仕事などについてお話いただいた。

（インタビュアー　石川則夫文学部教授）

一、國學院時代

石川　吉田先生は松阪のお生まれですが、國學院へ入学される動機はどういうところにあったのでしょうか。

吉田　実は、中学から高校までの六年間の担任、またクラブの顧問も全員、國學院出身だったのです。文学部に行くなら、國學院しか無いという感じでしたね。

その頃、地方では國學院ブランドは圧倒的な力を持っていました。国語や社会の教員、博物館の学芸員、どこを見回しても國學院出身者がいて、しかも三重県には神宮があります。出身大学名でずいぶん助けられました。

國學院に地方出身者が多かった時代の話です。

石川　大学に入学されたのが昭和五十一年ですが、その時から近世文学を学ぼうと思われていたのですか。

吉田　高校の頃から、上田秋成が好きだったので、一年の時から近世文学会という研究会に入りました。

顧問は秋葉直樹先生で、大学院で漢文学を専攻しておられた繁原央さん（後に常葉学園短期大学教授）、中学教師の山田俊幸さん（後に帝塚山学院大学教授）、高校教師だった横田章さん（故人）が熱心に指導してくださいました。佐藤謙三先生、また國學院久我山から琉球大学へ行かれた小島瓔禮先生、また嵐義人さんの薫陶を受けられた方々です。現在に至るまで、仕事の面でも、また個人的にもずいぶんお世話になっております。

石川　文学科の四年間で、どのような授業や先生が一番記憶に残っていますか。

吉田　平安文学の金田元彦先生、講師の萩谷朴先生、書誌学の是沢恭三先生、有職故実の鈴木敬三先生、目録学の浅野通有先生と、驚き、圧倒される四年間でした。

また国語学、漢文学の演習は厳しかったですね。もちろん國學院卒業生の信頼度の高さは、この厳しさの賜物ですが。

変わった先生も多かったですね。坂本和子先生の『伊勢物語』六十五段の課題など、未だによく覚えていますが、一体どういうことだったのかよく分かりません。一番よく分からないのはそれで優がもらえたことです。橘誠先生は、紙を配り、「國學院の校歌を書き、品詞分解しろ」と。校歌そのものがうろ覚えですからお手上げです（笑）。

いずれも印象に残る先生方でした。

石川　「国語学」ですと、その頃一番中核にいらっしゃったのは田辺正男先生ですね。

吉田　今泉忠義先生が急逝され、やがて田辺先生も退官という一つの転換期だったように思います。田辺先生の最終講義での『古事記伝』の話は強く記憶に残っています。松阪で自筆稿本を調査された時のお話しです。先生の『国語学史』でも紹介されていますが、原本を見ることの大切さを実体験に基づき話されたのがとても印象的でした。

不思議なことですが、他の講義で本居宣長の学問に触れることは余りなかったですね。土岐昌訓先生の「神道概説」や内野吾郎先生の講義では、名前は出て来ましたが、踏み込んだお話しは無かったようです。

国学の大成者である宣長と、國學院で出会えなかったことが、逆に、その後の私の中でいろいろ考えるところとなります。

田辺先生や、川上蓁先生の音声学、『源氏物語』の品詞分解と、

国語学の授業はずいぶん役には立ちましたね。

ただ、「國學院は文法に強い」と信じ込んでいる人が多いのには、正直困りました。「そういう人もいます」と弁解したことは一再ではありません。

石川　卒業後、私が高校等に非常勤講師として行っても、やはりそのように見られました。「國學院を出た先生だから漢文も古文も全部出来るはずだ」と言われいろいろな科目を持たされました。

吉田　正しく読めないと話になりませんからね。

石川　何とかその伝統は残していこうと思って、教員になっていく学生にはいろいろな授業を取らせるようにしています。田辺先生の頃からの『源氏物語』の文法の授業も二年生で必ず取るように指導しています。

石川　「近世文学」など他の授業はいかがでしたか。

吉田　「近世」は、須藤豊彦先生でした。また、一年の時の、「漢文」の瀧澤精一郎先生は栃木短大の先生でしたが、幾たびも『前赤壁賦』を吟じられたおかげで、今でも「壬戌之秋…」と空で言えます。記念館に入ってからですが、あるお宅で、床の間の掛軸を読み、驚かれたことがありました。字や漢文が読めたわけではありません。うろ覚えでもこの授業で、『古文真宝』の注釈書に親しんでいたおかげです。このアンソロジーは江戸時代ずいぶん広く読まれたようです。

瀧澤先生も有職故実の鈴木先生も、テキストやノートを見ないで授業をなさっていました。板書も美しかったですね。萩谷朴先生は、片端から板書をされるので、写しているだけで授業が終わりましたが、今もそのノートは大切にとってあります。

石川　授業以外は、ほぼ近世文学会中心ですか。

吉田　近世文学会と図書館、金があれば古本屋。

図書館は國學院だけではなくて、ぶらぶらと有栖川公園の都立中央図書館や、少し足を伸ばして国会図書館まで歩いて行って時間を過ごしていました。

近世文学会も、やがて先輩諸氏が去って行かれ、岡田哲先生が指導を引き受けてくださいました。ただ、どうも諸先輩が欠けると緊張感もなくなり、見かねた日本文化研究所の嵐義人さんが、こっそりと、刊行が始まったばかりの『洒落本大成』を読む会を開いてくださいました。

嵐さんの学識には正直、畏怖を覚えました。

石川　そのような中で、卒業論文のテーマはどの辺りを考えていかれたのですか。

吉田　卒業論文は秋葉直樹先生に提出したのですが、「血かた

びらの論」という、今となっては寝言のような不出来なものです。

「血かたびら」は、秋成『春雨物語』の一篇です。作品はともかくも、秋成論や注釈書に疑問を覚えました。これは普通に読んだらちっとも面白くない。ところが、秋成に駄作はないはずだという、絶対的な信がこの物語の正当な評価を妨げているように思えたのです。

古典は、多くの場合注釈付きで読者のもとに届きます。極端なことを言えば、注釈が読者の作品評価を決定づけることもあります。注釈によって作品評価がどのように変わっていくのかを考えていたのです。

それをまとめて秋葉先生に提出しました。もちろん当時は、原稿用紙に手書きです。

書いている時も、細かい指導もほとんどなく、提出後に、「字の誤りが多い」とか言われて(笑)、それで終わりです。

ただ、注釈の問題は、今も私の中ではかなり重要な関心事として継続しています。宣長の学問手法は注釈だからです。秋葉先生の指導の大きさが分かるようになったのは、ずいぶん時間が経ってからのことでした。

二、本居宣長記念館へ

石川　将来、大学を卒業してどのような仕事をしようとお考えでしたか。

吉田　全く白紙です。というより、本を読むことしか考えていなかったから、大学院以外の選択肢はなかったのです。

試験と面接も無事終わり、内野吾郎先生にご指導頂けることも決まり、いよいよ四月から大学院生かと思った矢先、故郷の松阪にある本居記念館から研究員に来ないかと誘いがありました。本居家は國學院とはゆかりが深く、また前任者もやはり院友の高倉一紀氏でした。

ありがたい話ですが、入学金ももったいないしと、秋葉先生に相談すると、答えは明解でした。「大学院を出てもなかなか仕事はないから、今就職した方がいいよ。本当に勉強したかったら戻って来ればいい」。

その一言で私の人生が決まりました。

もう東京に戻ることはなかったですね。

石川　ご縁がそのような形で繋がったわけですね。その頃の研究員は吉田先生お一人ですか。

吉田　研究員はもう一人いました。それから小学校の校長を退職した人が一人いて三人体制です。館長、事務室三人、研究室三人です。

石川　そうしますと、記念館の研究員になってから本格的に宣長の研究を始められたわけですね。

吉田　上田秋成をやっていたので多少の興味はありましたし、高校の頃は本居記念館の展示品の説明会などへ行ったりしていた位です。全く知らないというわけではなかったのです。ただ、大学の四年間はほとんど宣長と接することなく来てしまいましたから、戸惑いはありました。

石川　吉田先生の高校時代、松阪市の中で本居宣長という存在はどのような感じでしたか。

吉田　松阪肉はありますが、なんといっても宣長でした。入館者や取材もその頃は多かったですね。特に私が入った頃は非常に多かったです。今の倍ぐらいはいたのではないかと思います。

人気の背景には、小林秀雄の『本居宣長』がありました。この一冊の影響は、計り知れないほど大きかったのです。

石川　昭和五十二年に出版されましたからね。

吉田　加えて、吉川幸次郎の『本居宣長』、城福勇の人物叢書『本居宣長』。宣長全集は停滞気味でしたが編集は進んでいました。私の入る前年の昭和五十四年には、本居家からの第二回資料寄贈と、国重要文化財の追加指定がありました。

石川　研究員としてお勤めになって最初に、何をやれこういう仕事をしろというような具体的なことはあったのでしょうか。

吉田　何もない。新しい寄贈品や、従来の目録に未記載の史料を目録化する作業はありましたが、「まあ、また作ればいい」という感じでした。結局、それ以後、もう一人の研究員がやめるまでの十年間、ぶらぶらしていました（笑）、夢のような時代でした。でもこの時期は、私にとって大きな財産になりました。

学部や大学院を終了していても、宣長の業績を説明することは難しいでしょうね。ましてや、専門的な判断を伴う整理など無理ですね。歴史や文学では「若さは馬鹿さ」と言われたりしますが、たとえば、宣長自筆の歌がある。自筆か否かは、これは毎日見ているとなんとか判断は付く。しかしそれが、古歌、たとえば藤原俊成の歌であっても気づかないこともあります。「二十一代集」迄は望みませんが、「八代集」や「万葉」程度は一通り見ていないと使い物にならないです。

そんな話を、共立女子短大の杉崎一雄先生（故人）にしたところ、「「三代集」までは大体覚えているけど」とぼそっと言わ

れました。このような方でないと、宣長の学問などわからないのだと思いました。『日本国語大辞典』編纂にもかかわり、平安時代の敬語法の大家ですね。先生も院友で、名古屋での講義があると寄ってくださったのです。

杉崎先生だけでなく、私の大事な仕事は、来館された方とお話しすることでした。その頃、宣長研究の第一人者であった岩田隆名古屋工業大学教授から、「吉田君、君ね、勉強なんかしなくていい。心配しなくても、宣長記念館に来る人は、みな一流の人ばかりだから、話をしっかり聴いておきなさい。耳学問で何とかなる」と素晴らしいアドヴァイスを頂きました。

やはり院友で、文化庁美術工芸課の山本信吉さんにもよくして頂きました。ある時、館長に、「宣長を扱うには、高い学識が必要だから、内地留学でもいいから、もう一回教育し直しなさい」と言ってくださったのですが、それも果たせぬままになりました。先生は、後に奈良国立博物館館長を務められました。お父上も著名な神道学者です。

このように、ぶらぶらとしていたお蔭で悪知恵だけはつきました。文字も毎日眺めていれば、なんとか読めるようになるものです。調べるこつもわかってきました。

石川　その間は、自由に記念館の史料を読んだり、来た人の話を聴いたりして過ごされたのですか。

吉田　記念館も、初代館長山田勘蔵さんは学歴こそ無かったけれど篤実な郷土史家で、宣長についても綿密に調査しておられた。その下で、研究員も頑張っていたのですが、山田先生が高齢でやめられ、職員も変わり、ちょっと中弛みだったのですね。とりあえず三人の研究員がいて展示は分担しながらやっていましたが、ずいぶん大らかなものでした。自筆稿本『漢字三音考』が展示してあって、その解説を見ると、漢字の読みを書いた本だという、そんなレベルです。

その頃のことです。小林秀雄さんに講演を依頼したことがあります。おなくなりになる前年か前々年ぐらいでしょうか。やがて返事の葉書が届き、「もう話す事は何もない」と書かれていました（笑）。思いつきではだめだと言うことです。

記念館に入って間もなく、松阪郊外にある竹川竹斎の「射和文庫」の調査が開始されました。愛知教育大学の岡本勝先生、椙山女学園大学の杉戸清彬先生、皇學館大学の櫻井治男先生等が中心となった調査です。実はこの先生方は、国庫補助での記念館蔵書目録作成を昭和五十四年に終え、次に着手された調査でしたが、その仲間に入れて頂きました。

その「射和文庫」の調査をしていたメンバーが中心となって

「国学談話会」が出来ました。

一方、昭和五十四年に東京で「鈴門研究会」が発足しました。国文学研究資料館の大久保正氏を中心に、國學院出身の鈴木淳さんや岡中正行さん、中村一基さんたちがメンバーでした。

やがて、両方の会を合体させて学会を、ということになり、「鈴屋学会」が出来ました。

石川　合流して最初の「鈴屋学会」になった。

吉田　現在も継続する「鈴屋学会」の発足です。記念館に事務局が置かれましたが、初めの頃、私は会とは殆ど関わっていませんでした。やがてそういうわけにもいかなくなって、関わり始めていくことになりましたが。

石川　それからは毎年「鈴屋学会」中心ですか。

吉田　大会での公開講演会や月例講座など、学会の活動が、記念館の学術的な活動の根幹を成していくことになります。現在も続く「宣長十講」もこの学会との共催事業です。

石川　現在の会員は何名ぐらいですか。

吉田　学会員は二百名位です。

石川　やはり大学の研究者が一番多いですか。

吉田　最初は郷土史家や地域の名士も入っていました。実は、国学研究を推進してきたのは在野の人が多かったのです。高校の先生でもすごいレベルの方がおみえになりましたが、そういう人たちも去り、今は大学の研究者が中心となってしまいました。

三、『本居宣長全集』のこと

石川　昭和五十六年頃には、筑摩の宣長全集はほぼ出来ていたのでしょうか。

吉田　最後の二冊が未刊でした。十七巻「書簡集」と別巻三です。私が記念館に入ってまもなくのことですが、監修の一人、大久保正氏が急逝されました。特に未刊の巻は、大久保氏の力なくして完成は無理なのではないかと、みな天を仰いだのです。

宣長研究者はいても、全集編纂を遂行できるのは大久保さんしかいない。その仕事を補佐した筑摩書房の編集者・晒名昇（さらしなしょう）さん。お二人の力で、望みうる最高水準の全集は刊行されてきたのです。結局、大久保先生不在の後を引き受けてくれたのは鈴木淳氏でした。最終巻刊行は平成五年（一九九三）です。刊行の経緯は、別巻三、大野晋氏の「完結の言葉」に詳しく記されています。

ところで、私が「鈴屋学会」にあまり積極的でなかった理由

は、自分の中で二つの問題にぶつかっていて、学会どころではなかったのです。

問題の一つは、宣長の研究対象は、『古事記』、『万葉集』、『源氏物語』であり、あるいは『漢字三音考』や『字音仮字用格』など国語学ですね。近世文学とは全く違う領域です。

大久保先生は上代文学で、また岩田隆氏や鈴木淳氏は中古文学に造詣が深い。だが宣長は一人で全部をやっていますね。記紀を読んでいたかと思うと「源氏」を講じ、活用や漢字音のことを論じる。それに対応できる研究者は、明治の頃ならいざ知らず、戦後はまずいない。せいぜい学習院大学の大野晋さんか、愛知県立大学の尾崎知光先生くらいしかおみえにならない。果たして、近世に関心を持つ人が多く集う学会に何が出来るかと懐疑的になっていたのです。

それと重なりますが、どこまでも全体で宣長であると言うことです。『古事記伝』の執筆も、「源氏」や「新古今」をこよなく愛し、医者の仕事で妻と五人の子を養う。これら全部で宣長という人ですね。発表される論文を拝見していると、どうもその意識が欠落しているように思えてならなかったのです。

その中での、一つの希望の光が小林秀雄の『本居宣長』だったのです。

論者にとっての関心事や、都合の良い所だけを集めてきて提示するのでは、宣長という人はいつまでたっても理解できない。「宣長は一人である」という小林さんの態度が大変共感されたのです。

今もそう考えています。

石川　大久保正さんが、ある意味では本居宣長の全体像をしっかりと見据えることができる方だったのですね。

吉田　「源氏」についてはともかくも、上代文学の専門家ですし、史料調査も厳密で大事なところはきちんと押さえておられる。しかも歌人でもありましたから、実作者としての目もお持ちです。

宣長の場合は、全部史料がほとんど完璧に残っています。

先週の月曜日、岐阜県の可児市で宣長の話をしてきました。ご当地話をという依頼では無かったのですが、話の枕に可児との関わりを少し紹介しました。

宣長は、可児周辺を訪れていませんが、『万葉集』巻十三に「八十一隣」が出てくるので、これを手がかりにします。

「八十一隣」はククリです。現在の岐阜県可児市久々利だとされています。ここは陶芸家荒川豊蔵が有名ですが、宣長の『答問録』を刊行した千村仲雄の宰領していた場所でもあります。

その事には今回は触れません。

まず手沢本『万葉集』に宣長は、これは土岐郡であると書き入れています。これは可児郡の誤りでしょう。

ククリは『日本書紀』景行四年条にも出てきますので今度は「書紀」を見ると、「泳宮」とあり、脇に「万葉」巻十三に出ること。美濃国可児郡であること。今もある地名で、ククリと清音で読むと書き入れがあります。

次に手沢本『版本和名類聚抄』を見ると、可児の所のカコという版本の振り仮名をカニと正し、「今国人カニト云」と書き入れます。

また、息子春庭が写し、宣長が書き入れた「美濃国図」という地図がありますが、その可児の所だけで四十ぐらい地名を記載しています。

未だ見ぬ美濃国可児にまで関心は及んでいる。その関心が深まる過程を紹介することで、宣長にとって学問とは何であったのか、その歓びをまずお話しします。

頼まれて話しに行く時には、その土地のことをなるべく入れるようにしています。自分が住んでいる場所にまで宣長の関心が及んでいたことを知ると、親近感がわいてきますね。それを狙っているのですが。

たとえば『延喜式』神名帳を見ると、『古事記』や六国史との相互参照のための丁数が書き込まれます。十七歳の時に作成した「大日本天下四海画図」には三千百の地名が記載されています。必要なところだけで無く、完全帰納法のように、網羅的に全部調べるというのが、宣長の、というか近世の学問ですから、探せばどこの地域でも、関係の一つや二つはありますね。

話は逸れましたが、このように宣長の学問は、深化していく過程をたどることが出来るのです。版本や活字本でも、実は完成形態ではない。ぐんぐん成長していきますから。田辺先生のお話も、実はその流れを、先生が確認されたというところに意義があるのです。

成長し続ける宣長の学問、大久保さんは、その事をよくご存じで、最初の業績である『本居宣長の万葉学』でも、網羅的に史料を見るということをなさったのです。

大野晋さんは完成形態、つまり版本第一主義ですが、「宣長全集」の監修を頼まれた時に、同級生だった大久保正さんを誘ったわけです。大野さんは非常に適切な人選をされたのです。

宣長のことを調べるには、結局、記念館にある史料と向き合うしかないのです。ただその前提として、山本信吉先生がおっしゃったように、基礎学力をつけて、研究の手法を学ぶことが

どうしても必要なのです。目録作成だけでなく、展示品につける解説、キャプションも実は大変難しい。限られた字数で、成立年次や内容、執筆理由、意義まで伝えなければならないのですから。

「宣長の字はきちんとしているが、解説の字は下手だ」と見学者から呆れられたりしました。下手な字の問題はワープロのおかげで解決しましたが、内容はそう簡単には参りません。

石川　その時に、史料をちょっと見せて欲しいというような要望も出るわけですよね。

吉田　記念館の収蔵品は原則として完全公開です。規定はありますが、余程のことがない限りはお見せするというのが一貫した姿勢です。

四、学芸員の仕事

石川　自由な十年の間にいろいろな先生が来て、逆に先生たちから教わるということもあったのでしょうか。

吉田　余りにもこちらが無知なのを気の毒がって親切に教えてくださったのでしょうね。

石川　大学四年間に本居宣長の名前と話を聴いたのは、田辺先生の授業ぐらいだけだったのですよね。

吉田　そうですね。ただ、國學院を出て本当に良かったと思うのは、その頃の地方では國學院の信用度が高かったことです。しかも三重県には、教育界の重鎮や、神宮にもたくさんの院友がおみえになります。色々と気に掛けてくださるのです。実は今でもお世話になっていますよ。

よく若い人に話すのですが、学芸員はどこに行ってもひとりぼっちです。特別展をやる時も、手伝ってはくれますが、結局は自分で企画し、交渉するのです。作品貸し出しの最終判断も、館の名前ではなく、担当学芸員が信頼できるかという一点にかかってくるのです。あってはならないことですが、作品が破損したりすると、学芸員は自分を責めるのですね。それはまずいといっても始まらないのです。

作品は、みな超高齢者のようなものです。いつ何が起こるか分からない。軸の掛緒が切れたり、軸首が外れたり、想定外のことが起こる可能性は常にある。高湿度の環境にあった物を五十五パーセントのケースに入れたらどうなるか。

また、予算や入館者数など問題は次々に湧いてきます。そんな時に、相談する人がいたらどれほど楽か分かりません。

記念館に入った頃、西日本人文系学芸員研究集会に出ました。

その時、主催者の方が言われたのは、「学芸員は泣きつく場所がないのだ。とりあえず、横に繋がれ」でした。最近の学芸員の研修会では、このような切迫した発言は聞かなくなったのですが、安心は出来ませんね。

石川　昔から、國學院の卒業生は地味であまり派手なことはしないけれど、着実に仕事をするという定評があります。

吉田　信頼度が高いですね。

ところが私の無学はどうにもならない。

平成六年二月九日から、岩田隆先生と勉強会を開始しました。以後、平成二十四年に体調を崩されるまで十八年間、月一度のペースです。内容は宣長著作の読み合わせ、発表された研究論文の問題点の抽出。新出史料の解読などです。

きっかけは、「記念館の展示解説があまりにも情けない。ちょうど自分の勉強のまとめもしなければならないので、勉強会をしよう」ということでした。

史料の見方、考え方を、原本だけで無く、『源氏物語』や『万葉集』にまで遡って確認しながら読み進めていきます。時には、天理大学付属図書館まで出かけて史料を調査しました。

石川　それは素晴らしいことでしたね。

吉田　國學院に入った頃から、人にだけは恵まれました。卒業してからも、「宣長に関心を持つ人は一流だ」という岩田先生のお言葉通り、素晴らしい方と出会うことができました。尾崎知光先生、岩田隆先生、またご専攻はフランス文学でしたが和歌山大学教授の多田道夫先生には格別のご指導を賜ることが出来ました。

石川　そういうことから言えば、史料の中身は全部わかっていらっしゃる。まだ分からないところもあるのですか。

吉田　正直なところ、全く手つかずのものがどっさりあります。今も「源氏」や「万葉」を開いて眺めていると、発見があります。これではだめなのです。作品の主たる所は諳んじている宣長が全速力で走っている。それを、注釈書を見ながらオタオタついて行くのですから話になりません。

頼みの綱は、尾崎、岩田、多田に教えて頂いたこと、そして小林秀雄です。

「なぜ小林か」ですが、小林の『本居宣長』は、宣長の名文選でもあるのです。中には、真淵の書簡など基本資料が網羅されます。この文庫を鞄に忍ばせて、暇を見ては、引用したところを読み、鑑賞や解釈を確認しながらもう一度読み直してみるのです。気になる所はもちろんありますが、これに勝る指針はないのです。

宣長最後の仕事は『続紀歴朝詔詞解』、つまり『続日本紀』に載る「宣命」の研究です。

「宣命」について小林は、『続紀歴朝詔詞解』の文章を引き、「宣命」というものは天皇の詔の言葉ではない、詔の言葉を発する、その行為であるということを書いています。

今、宣命を研究した論文を見ても、どこまでも文字資料としての「宣命」であって、実際に唱えられていた現場を思い描いているようには見えませんが、宣長は唱える声の大きさまで考えようとしています。

このような態度に小林は敏感に反応し、散逸した「宣命譜」にまで言及し、宣長に寄り添うように、考えていくのです。「常に発見はある」ではなく、私の場合は「いつも見落としがある」です。繰り返し見て、写し、また声に出して読んでみないといけません。

最近もある方の講演資料を見ていて、発表の論旨とは全く関係ないのですが、『字音仮字用格』に「秘すべし秘すべし」とあることに気づきました。全集からの引用だから版本の翻刻です。ご承知の通り『玉勝間』の中で宣長は、私が契沖や真淵の説を批判したように、私の説を乗り越えて行けと後進を励ましました。「師の説になづまざること」ですね。また、「発見したことは全部書いておいた」とも述べています。ところが「秘すべし秘すべし」です。何度も読んでいるはずなのに、いつも変だなと思いながら、見落としていたのです。

可児での話を先ほどしましたが、展示企画や講演はなるべく引き受けています。見る角度を変えるよいチャンスだからです。場当たり主義でよろしくないのですが、このような方法でも採らないと、網羅主義で、しかも一切手抜き無しというような宣長の史料を扱うことは出来ないのです。正攻法ではないけれど、勘は養えます。

石川　御著書『宣長にまねぶ』を読ませて頂いたのですが、非常に宣長の生涯が分かり易く、急所急所がうまく出来ています。また『本居宣長　日本人のこころの言葉』こちらも素晴らしく面白い。中世文学の春田宣先生の授業で『玉勝間』を一度教わっ

た覚えがあります。今更ながらに思うのは、「ああ、こんなにやさしい言葉を遣う人が学者にいるのだな」ということです。

今、自分もそういう端くれになってきて思うのは、やはり宣長というのは、こんなにやさしい言葉で難しいことをきちんと正確に書けるのだという、その辺は今一番感心しているというか、不思議にも思っているところですね。ともすれば、研究者なんて難しい言葉を遣いたがるものですけれど。

吉田　『古事記伝』でもそうですが、テンポ、リズムが良いのです。音読するとよく分かるかもしれません。

本でも書きましたが、調べるほどに、宣長はどうも勘定が合わない人だと思えてならないのです。時間が足りなくなるのです。朝の拝礼、睡眠、食事、往診の時間、講釈、執筆と足していくと二十四時間に納まりきらない。予算みたいですが、どこか削減できないかと点検していくと、机に向かって考える時間なら削れます。考える時間として独立して取らずに、何かと合わせるのです。すると寝る時間以外で一番多そうなのが歩く時間です。

宣長という人は、歩きながら思考ができる人だったのではないか。たとえば『古事記伝』草稿を見ると、非常にスピード感があります。筆の速さもですが、思考の速さではないか。ああでも無い、こうでもないと、頭の中で検索を繰り返し、「かむかへ」、比較しながら、より自然な解を求めようとする。だから、引用文なども空で覚えている概略を書くだけです。片時も停滞していない。

このように歩きながら考え、帰ったら大急ぎで書いたのでしょう。

考えることが、楽しくてならないのです。『記伝』には、「未だ詳ならず」という言葉が度々出てきます。『国号考』では、「真淵先生の説でたぶん良いが、それ以外に私も試案を三つ挙げておくので、検討しなさい」と書きます。

リズミカルな思考なので、当時の学者の中でも断然読み易い文章となります。契沖や真淵や、秋成と比較して頂くとよく分かります。

頭の良い人の文章は明晰だ、それももちろんですが、執筆環境も考慮に入れる必要があると思います。

八年近く『古事記伝』音読の会を開いています。その話をすると、注釈書を音読して意味があるのかと首をかしげられます。参加者は平均三十名位、専門家はごく少数、ほかは主婦や医師、会社員やご隠居。そんな人が『記伝』を読んで分かるのかといぶかしく思われるでしょうが、音読しないと分からないことも

あります。なにより、音読することでテンポの良さが分かってくるのです。「ああ分かった」という宣長の喜びの声も聞くことが出来ます。

このように思考のプロセスをたどるとき、宣長という人はきっと歩くのも速かったのだろうなと思います。

小林秀雄も歩くのが速かったそうですね。

石川　そのようですね。夢中になって考えていて、どこかへ行く途中に目的地も忘れて通り過ぎるというエピソードも聞いたことがあります。

吉田　宣長がたくさんの仕事をこなし、大きな成果を収めることが出来たのは、よく歩くことと関係するというのが私の自慢の説です。それだけでなく、何事も一切手抜き無しで、しかも判断基準として「本か末か」を常に問う。レスポンスがよく、問題を先送りせず、とりあえず手を打つ。工夫の塊のような人です。

宣長を理解することは困難ですが、真似することで、多少は私達の日常生活ももう少しすっきりするかなと思います。そう思いながら四十年近く過ぎましたが、実行はなかなか難しいですね。

石川　ある意味では、本居宣長を知るということでこれまでの時間をずっと費やされて来たことになりますね。

吉田　そういうことになりますね。

石川　振り返ってみて感慨は、でもまだこれからですね。

吉田　館長の主たる仕事はマネジメントです。施設管理や人事、公益財団ですから寄付金集めと、ゆっくり史料を見ている暇はありません。

記念館に入った頃のように、終日、史料や全集を眺めていることができたらどんなに楽しいことかとも思いますが、考えてみると、宣長は国学という新しい学問の基盤整備をしたわけですね。しかも家事も切り盛りしながらです。抜群の事務処理能力、あるいは危機管理能力があった。『記伝』刊行の実務から、為政者との対応に始まり、宿に困る弟子にはその手配をし、本屋のキャッチコピーを作成する。家人から「今夜は鯨汁です」と聞いたら、鯨汁が好きだった弟に「食べにこい」と誘う。

静かな別宅でも構え、松風を聴きながら本を読むのは趣味ではないと言っていますが、雑務にまみれながら学問を続けたのですね。

のんびりと本を読みたいと言ったら宣長先生に叱られます。ああ、大事なことを思い出しました。

岩田隆先生から、「勉強をしなくて良い、耳学問で良い」と

いうことを言われたことはお話ししましたが、もう一つ繰り返し言われたことは、「宣長先生と自分を決して比較してはいけない」ということでした。

実体験にもとづく宣長の工夫やアドヴァイスはたとえ猿真似でも、きっと効果はあるはずですが、比較してはいけないのです。

石川　自分の身の丈に合ったことをしなさいということですね。

吉田　一番難しいことかもしれませんね。

五、母校で学ぶ人々へ

石川　最後に、國學院の学生へのメッセージをお願いします。

今までいろいろな研究員を大学から採用されて来た経験もおありでしょうから、吉田館長から見て、大学の時にこういうことをきちんとやっておくべきだということがありましたらお願いします。

吉田　國學院の教員の層の厚さは抜群だと思います。伝統の力ですね。今役に立たない、面白くないと思っても、とりあえずひと通り受けておくことをお勧めします。

真淵は宣長に仲間との交流を勧めました。ネットワークです。もちろん孤独な時間も必要ですが、横にまた上下に繋がっていくということは、どのような環境でも必要だと思います。

また、大学が都心にあるという特質は存分に活かすといいですね。必ず役に立ちます。

さて大学を出てからですが、就職し、やがて定年を迎えるまでに約四十年という時間がありますね。これは宣長が京都で『古事記』を買ってから、『古事記伝』全巻終業するまでとほぼ同じ時間です。宣長は医者をやりながら志を遂げたのですから、その実体験にもとづく『うひ山ぶみ』をていねいに読んで頂くと良いでしょう。すると目標の設定の仕方などが見えてくるはずです。

石川　時々私も、いろいろな企業の人事担当の方と会ってお話を伺う機会があるのですが、「どういう学生を一番採用したいですか」「どういう学生になってもらったら一番良いとお考えですか」と聞くと、皆、大体二つの同じことを言います。

一つは、「横の繋がり」と同じで、他人ときちんと話ができるということ、受け答えがきちんとできる、コミュニケーションがとれることとだと言います。外国語が出来るとかそういうことではないと言います。

もう一つは、自分達が今やっていることをもう一つ違う視点

で見ることが大事だと言いますね。会社に入ってグループで企画を進めていく時にいろいろな人に会うけれど、自分達の見方だけでやっていたらダメだということですね。外の見方というか、第三者の視点に立てるかどうかということです。

文学研究でも同じことですから、「文学をやっていれば必然的にそういう見方が出来るようになるはずだなぁ」と授業では言っているのですけれどもね（笑）。

吉田　人文科学は人間の尊厳を考える学問ですからね。

宣長の学問のテーマを一言で言うなら、日本人とは何かという問題の解決でした。もちろん一人の力でそれを明めることは出来ませんが、宣長は学問の未来を信じ、次の世代にバトンを託しました。國學院で学ぶ皆さんは、自分はその選ばれた走者なのだという自覚を持って少しでも前進していただき、次の人にバトンを渡してほしいと思います。

そのためにもぜひ幅広く、他の学問領域の成果をも積極的に取り入れていってほしいものです。

宣長が選んだ「注釈」という方法は、いわば実践の学です。全方位的な知見が求められます。幸いにも私は大学で萩谷朴先生という大注釈家の学問に触れることが出来ましたが、自然科学にまで及ぶ驚くべき広さと深さを持っていました。

科学や技術の急激な進展も注視してほしいですね。時々、シンギュラリティということを考えます。やがて宣長の全史料をも取り込んでいくであろう人工知能は、いったいどんな宣長像を描き出すのか、あるいは評価するのか楽しみですね。これは宣長だけの問題ではないはずです。

石川　学生時代は、いろいろなことを身に付ける、いろいろなものを覗くチャンスだということですね。

研究員を長年続けておられる間に、「あ、これは大学で習ったことだ」「話を聴いた覚えがある」ということはありましたか。

吉田　民俗に関わることから刀剣等の扱いまで数限りなくありましたね。

石川　大学四年間で「ああ、これをやっておいてよかった」と一番に思うものは何でしょうか。

吉田　本を買ったということです。

笑い事ではなくて、私達の仕事は本がなければ何も進みません。本だけは、妙なたとえですが、息をするように買い続けました。

でも、今も鮮明に記憶するのは秋葉先生の机に山積みされた新刊書の山です。外国文学から思想書、注釈書。次々に増えて、どんどん入れ替わっていきました。文学研究はこれくらい本を

買い続けないといけないのかと、驚くより、呆れました。

あとは、耳学問でも良いのでとりあえずはひと通り聴いて、聴き上手になってほしいですね。すると横の繋がりもできますので、なるべくいろいろな人と会うことをお勧めします。

最近も記念館のホームページで書いたのですが、宣長は一人で考える時間と、人と会う時間をうまく組み合わせ、自在に行き来しています。これも大きな効果を生みそうです。

それと、チャンスだけは絶対逃したらダメですね。誰かに教えてやろうとか、勉強会をやるよと言われたら、忙しくても参加することです。

記念館の岩田隆先生の勉強会以外にも勉強会に誘われたことがありましたが、忙しいとか旅費が高いなどと言って中途半端に終わってしまいました。今となっては非常に惜しいことをしたと思います。契沖が「俗中の俗、俗中の真」という言葉でその事に触れています。小林秀雄の『本居宣長』に引用されていますから、ぜひ探して読んでください。

教えてやろうという人がいたらやはり教わるべきでしょうね。國學院には教えたくて仕方ない人がきっとたくさんおみえになるはずですから(笑)。

石川　どうも長くなってしまいましたが、本日はわざわざおいでいただいて、ありがとうございました。

吉田　ありがとうございました。